

Title	哲学第146集編集後記
Sub Title	
Author	峯島, 宏次(Mineshima, Kōji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.146 (2021. 3) ,p.193- 194
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：岡田光弘教授 退職記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000146-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

岡田光弘教授は1990年のご着任以来、これまで長年にわたり慶應義塾で教鞭をとり、哲学専攻での教育・研究を中心に多方面で大きな功績を残された。また、2014年に初代所長として論理と感性のグローバル研究センターを設立するに至るまで、塾内の数多くのプロジェクトの拠点責任者を努め、研究の発信と研究者の育成にご尽力された。本号は、岡田先生がこれまで指導してきた学生、及び、哲学とその関連分野の共同研究者を中心に、岡田先生の業績を讃えとともに、それを少しでも発展・普及させることを目的として編纂されたものである。

ここに掲載された論文は大きく分けて研究論文（原著論文）と寄稿論文・エッセイに分かれる。研究論文としては、哲学・論理学の中でいずれも岡田先生の研究領域とかかわりが深い、線形論理の意味論（小関健太郎・岡田光弘「線形論理の意味論のTruthmaker解釈に向けて」）、証明論と順序数（秋吉亮太、アンドリュー・アラナ「竹内の整礎性証明再訪」）、言語哲学・自然言語の形式意味論（天本貴之「動的意味の真理条件の性質」）、分析哲学・形而上学（北村直彰「基礎づけの基礎づけ」問題の構造）という多岐にわたるテーマの論文が集まった。

寄稿論文としては、意思決定の心理学（森井真広・井出野尚「図的表現を用いた多属性意思決定研究に関する現状と展望」）、図的推論の論理学（竹村亮「図形表現を用いた証明の正規化について」）、図的推論の認知科学（佐藤有理「否定は描けるか」プロジェクトの概要：意味論と実世界データ分析）という、いずれも岡田先生がこれまで深くかかわってきた学際的な研究プロジェクトについて、第一線の方々から研究の現状と展望をコンパクトにまとめた論文

をご寄稿いただいた。また、エッセイとしては、岡田先生と論理学・計算機科学の分野で共同研究を行ってきたお二人からご寄稿いただいた（高橋優太「計算と演繹—個人的な回想—」、長谷部浩二「師資相承」）。いずれも、岡田先生との共同研究、また研究指導の雰囲気をよく伝えるものとなっていると思う。

本号に掲載された論文・エッセイは岡田先生の業績と深い関連があるものを中心に編まれているとはいえ、その主要な専門分野の一部をカバーするものに過ぎない。岡田先生の業績のうち主たるものは、「業績抜粋」として本号冒頭に掲載しているが、そこには例えば、フッサールとウィトゲンシュタインについての一連の世界的な業績から、デカルト研究（「デカルトにおける「論証」の概念と彼の形而上学的論証の論理的基準」三田哲学会編『哲学』100号）まで、哲学史の深い知識と哲学的洞察にあふれた研究が含まれている。じっさい、岡田先生の重要な研究分野の一つである計算機科学の専門家から、計算機科学の岡田先生と哲学の岡田先生が同一人物だとは思ってもよらなかった、という逸話を耳にしたことがある。また冒頭の岡田先生ご自身によるエッセイ（「大出見（大江晃）先生の想い出」）に垣間見られるように、印象深い多数のエッセイがある（例えば「竹内先生とロジック」『数学セミナー』2018年2月号所収）。

業績抜粋を見れば分かる通り、岡田先生の中で哲学とは、文学や芸術とも近接した領域であると同時に、論理学とつながりのある新しい科学（情報科学・計算機科学・人工知能から認知科学・言語学まで）の発展を助け、その分野に新たな展望を開きつつ、伝統的な哲学にもそれまで受け入れられてきた前提や常識に対して再考を迫るよ

うな、きわめてインタラクティブな営みとして実現されている。科学（特に論理学と情報科学・計算機科学との融合）に対してその内側から、その分野の研究者とともに考え、その分野に影響を与えるような独創的研究を行ってきたという点に、岡田先生の研究の特色のひとつがあるように思う。これは決して容易にまねできることではな

いが、哲学のひとつの姿として、われわれ後進の研究者が少しでも見習うべき模範としてあり続けるだろう。本号に採録されている論文・エッセイと業績抜粋がこの科学とも文学とも近接する哲学の姿を一部ではあるが、広く報告し、その価値を周知させるものとなることを願う。

（峯島宏次）

2020 年度三田哲学会編集委員

峯 島 宏 次（哲学）
山 内 志 朗（倫理学）
望 月 典 子（美学美術史学）
近 森 高 明（社会学）
兔 田 幸 司（心理学）
渡 邊 福 太 郎（教育学）
菅 さ や か（人間科学）

2020 年度三田哲学会役員

会 長	斎 藤 慶 典
監 事 監 査	石 田 京 子
幹 事 長	山 内 志 朗
幹 事（渉外）	斎 藤 慶 典・山 内 志 朗
幹 事（会計）	菅 さ や か・渡 邊 福 太 郎
幹 事（庶務）	近 森 高 明・兔 田 幸 司
幹 事（編集）	望 月 典 子・峯 島 宏 次